チートによる自動股

さよならデータさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺つえー系超文明系無謀転生オリ主

が

人類が機械文明に皆殺しにされたと勘違いして

人類復興を目指す話（嘘）

目次

ch—1　第三勢力　異星有機人類 ——— 1
ch—1—1—a　意図せぬ接触 ——— 11
ch—1—2　暴走するアンドロイド達 ——— 20
ch—1—3　パスカルの村の来訪者 ——— 29
ch—1—3—2　油断 ——— 39
ch—1—3—3　ジョークグッズと書かれたアイテム ——— 49
ch—1—4　有り得ない青空 ——— 62

ｃｈ―１　第三勢力　異星有機人類

陽射しの明るさに目が覚めた。
この星に降下して２日も経つ。
唐突ではあるが自分は転生者とよばれる人種である。
よくある大型運搬車に撥ねられ、気がつけば新しい世界に生誕していた。
恵んでもらった能力はもうほとんど覚えていないが確か知能系や資源関係、そして住む環境に関してだったと思う。
生まれた当時から天才児と持て囃され、大規模な技術発展、ブレイクスルーといった貢献を果たしてきた。
二次元や空想でしか実現しなかった機械の友人『アンドロイド』。
それを発展させ、人型機動兵器の開発や自動人形に発展型ＡＩ、原子変換器、外宇宙航行艦といった様々な物まで開発、改良した。

――――自慢話はキリがないのでここまでにしてなんやかんやでそこまで作った自分は狭くなったと感じた地球からでて星から星へと続く長い大航海を始めたのだった。
あっ、ここで終わりじゃないよ。

真面目に話すのはこの辺にしてさっきの特典の話になっちゃうけども住む環境ってとこ。
いわゆるクロスオーバーっていうか多重世界ってやつなんだけどこれがまた厄介なんだかスゴいんだか半々で他の世界に行くなら平行世界を移動する手段が必要なんだけど自分の場合、そうじゃなくてそういった世界が銀河系、惑星として多様に存在している。
つまりこうやって移動することでその世界を堪能できるんだ。

ビバッ、ファンタジー、転生特典ってな感じでね。
まぁ、何故か自分たちが来たときに決まったようにイベント始まっ

たりすることが多いけどそこら辺は気にしない。
気にしたってしょうがないしね。
とにかくそんな感じで色々とありながら（その星に定住したり、自殺や異星人とかと戦って死んだり、新しい船を製造して別の軌道に別れたり）はや1万年くらい。
寿命すらも克服し、新しい旅を続けた我が艦隊は数だけはあるもののもはや乗艦している人間は自分一人であった。
自身の自我もそろそろ自死を考えた矢先に唐突に、それは起こった。
最初は艦隊の長距離ワープが失敗したと副官の自動人形が報告に来たときからだ。
「ワープポイントがずれた？」
「はい、現在規定ルートから外れ別の軌道を進んでいます」
なんでもワープの際に何かに引かれるように転移先がずれたらしい。
なんらかの機材の不具合だろうかと考えて修復指示をだそうとし、副官がポツリと呟いた言葉に塗り潰された。
それと少し先の宙域に地球型惑星を発見しました。
その言葉とともに先程の思考を振り切り、降下準備並びに高度ステルス航行に移すように指示を行う。
交渉するかはその文明の発展度合いによるが暫く暇は潰せるだろう。
そう思った。いつもの様に変わらない、普通の滞在になるだろうと。
「探査ポット射出」

「映像動機します」
「広域スキャン開始、宙域に人工物あり。
建造物のようです」
「大気圏突入、落下地点誘導します」
「謎の機動兵器による迎撃を確認、同時に魔力反応確認！　大型兵器による高エネルギーの迎撃！」
「エネルギー障壁展開！　探査ポット健在、落下地点の大幅なズレが発生、修正を開始！」
「地点確認、落下地点は砂漠になる模様」
はっ？えっ？
「探索、降下に設定した場所は？」
「恐らく日本だと思われます」

副官の言葉に息を飲んだ。迎撃を受けたのは仕方ない。
無理矢理アポイントもとらず押し掛けた此方が悪い、何より不法侵入だ。
撃たれて当たり前である、しかし――
何故日本に砂漠があるのか。
今まで来た惑星で毎回なんらかの特異点だったりしたが砂漠は初めてである。
「環境破壊でも進んでるのか？　ポットの映像を此方に回せ！」
後からのんびり遊ぶ算段を付けて降りる筈がまさかの事態である。
何があったと思わず大声を出してしまいそうなほどに。
そして確認すればする程にその異常さが増してくる。
「なに、あのメカ沢みたいなの」
「どうやらこの星を支配している生態系の頂点に機械兵器が君臨しているようですね」
「ちょっ、人類負けちゃってるよ。機械に文明乗っ取られてるとか以前に生存競争に負けちゃってるよ!?」
で、肝心の人類は何処にいるんだろうか？
「副官、俺達人類は何処にいんの？　生体反応スキャンできたで

しょ？」
結果を副官に急かす、自慢話になるが惑星間を軽々と調べられる程に家の解析装置は強い。
神様チートによる高度文明の機器だ。
技術的に基本、圧倒的に他者を引き離している自分たちはどこに行っても負けた試しがない。
ファンタジーや魔法にもだ。
ただしマグロみたいなオカルトは勘弁な、正直死にかけたので。
「お喜びください、マスター。」
副官の自動人形は嬉しそうに笑いながら告げた。
『どうやら貴方がこの星唯一の人類のようです』
それを聞き、無意識に顔を覆った。
多分、この時目が死んでいたと思う。
「今降ろしたポット、マテリアルボディとか生体部品使ってるのしかないみたいなんだけど…」
地球型惑星と聞いて完全に肉の義体を用意して送ってしまった。
完全に盲点、いや、想像つかないでしょ。
星が機械に支配されてるなんて。
「でしたらそうですね、では今回は見送りましょう」
いつもよりも笑顔で副官が話かけてくる、それはもう嬉しそうに。
ついでに、
「次のポットユニットが落ちるのはいつか分かりませんけど」
とわざわざ付け加えて――――。
溜め息をついた。
どうしてこんな気になる興味の対象を見過ごさねばならないのか。

何故人類はいないのか？　実はまだなんらかの手段で隠れているだけではないか？　あのロボット達はいったいなんなのか？
正直自分は我慢強いタイプではない。
こんななにもかも間に合わなかったケースは初めてであり、貴重なサンプルケース。
多少の危険はなんのその、ただでさえ長い航海で磨耗した精神に栄養が、今は刺激が必要だ。
でなければ――また余計なことを考えてしまうだろうから…。
そうと決まれば早速指示を出す。
「いや、戦闘型強行偵察ボディユニット生成を始めろ。
現地を調査する、砂漠に入る前に装備とボディを切り離し、別地点に降下だ」

それに俺の意識データをインストールする。
そう言った俺に副官は猛烈に反対した。

「…。危険過ぎます。
次のポットに護衛機を積みますのでそれまで――」

「マスター権限による命令だ。正直もう待てない、意識データを転送して現地調査する」

「――分かりました、我々もすぐに向かいます。
あまり無茶は為さらないように」

「あいあい、じゃあ出来たら早速やってくれ」

「了解しました、必ず帰ってくるように。
これは私からの忠告です」

それにわかってると答え、データ転送の為に機器を接続した。

願わくば今の退屈さを凌ぐことができればと思って。
――絶対に無事の帰還をお願いします――
最後にそんな言葉が聞こえた気がした。
▽

とりあえず探査ポットに意識データを移し、高速機動を行いながら地上を目指していた際にふと何かが軌道降下してくるのが見えた。
黒のカラーリングが主体の恐らく戦闘機。
隊長機もいるのか白にカラーリングされた機体が一機共に航行している。
現地の迎撃部隊だろうか？
しかし、

「何あれ、滅茶苦茶かっくいいんですけど」

ブリキ缶みたいなロボットしかないと思って見ればあのようなカッコいい機体があるではないか。
良かった、正直現存する機械が全部あのブリキみたいな奴等ならどうしたものかなと思っていたところである。

「およっ？」

此方のポットに並んだかと思うと一緒に並行して飛び始める。
そしてなんと変形までしたではないか。
一機くらい持ち帰って調べ尽くしたいものだ。
あれっ？よくよく見てみれば人型が機体に繋がっているではないか。
まさかパイロットだろうか？

この状態でどうやって慣性を消して――――。
アラートと同時に意識を戻して機体を傾ける。
目の前を大量の光弾が横切った。
迂闊だった、このポットは最初の方で地上から迎撃を受けていた。
すっかり観光気分になって忘れているなんて。
更にアラートが追加表示される。
「前方から高エネルギー反応？　挟み撃ちかよ！」
　各所のアポジモータ、スラスターユニットにエネルギーシールドを展開する。
「緊急回避後に加速、その後からジャミングとフレアチャフを巻き、ダミーユニットをボディと同時に別地点に射出。
　ボディユニットは光学迷彩とステルスジャマー展開して慣性射出。
　タイミングは６０後!!」
　とりあえずはボディユニットの降下を優先させ、可能ならば敵性機体を排除する。
　のだが、
「完璧に油断した、降下及び現地調査を優先したせいで一切武装のないポットだとは！
　ちくしょー、ここ最近戦闘なんかなかったから油断したぁ??」
　まさか完璧なまでに装備がないとは思わなかった。
　その代わりに防御性能は高いもののただ殴られるだけではいつかやられてしまう。
　なにかないかと搭載ユニットを漁る。

「おっ！　電脳戦用ユニットあるじゃんか、これなら!!」

　本来は現地文明の情報を抜き取る為のものだが軍事用のものにも使えなくはない。
　相手に早速クラッキング、まぁハッキングを開始。
　周囲の機体に電脳戦をしかけ、掌握する。

拍子抜けするほどに簡単に決まったがそれは問題ない。
「どうだ、これなら撃てまい!? 仲間がいてはなぁあ!!」
気分は某御大将、敵性機体をポットの前に壁のように配置する。
どうだどうだ、これならば――――。
「えっ…」
極大の桃色光線が此方に向かってくる。
思わず緊急回避にスラスターを吹かし、戦闘機達を散開させる。
まさか味方ごと撃ってくるとは。
仕方なくこの機体達はやってくる子機の相手をさせ、ボディユニットを降下というより射出させた。
それと同時にハッキングを解除、コントロールを相手に戻して離脱した。
それにしてもおかしい、敵性機体である戦闘機もブリキ缶型の機械に反撃を受けていたような――――
先程のハッキングで軽く抜き出した情報も軽くでいいから調べる必要があるな。
振動ともに機体が止まる。
漸く着いたのだ、この星の大地に。
そして私は、
「なんだよ、これ…」
もはや跡形もない文明の残骸を、廃墟として崩壊した都市をこの目で見ることになった。
▽
「2B、司令官からの話どう思います?」

目隠しをした少女に少年は問いかける。
彼らはヨルハ部隊のアンドロイド、少年はスキャナーモデルの９Ｓ、少女は戦闘モデルの２Ｂといった名称をつけられている。
彼らは自分たちの司令官からある話を聞かされていた。
降下作戦時に接触したポット。
これがエイリアンたちの増援か新しく生まれた機械生命体、
もしくは全く関係のない第三勢力になるであろう異星人の可能性があるといった話だった。
２Ｂと呼ばれた少女はその質問に少し考えて、答えた。

「正直に言えば私はそうかもしれないと思っている」

その言葉に９Ｓは驚きの声を発する。
だが２Ｂはそれっきり無愛想に返事を返しただけだった。
さほどの抵抗も許されず、ハッキングされ操られた自分たちの義体。
もしこれが、これを行ったのがあの異星人なら…。
そう考えてその思考を払うように頭を振った。

「もしそうなら友好的な異星人だといいんですけどね」

そう楽しそうに言う少年に視線を向けながら、

「調べれば分かること。行くよ、９Ｓ」

そう告げて彼女は格納庫へと向かった。
任務の内容は砂漠に落ちたと思われるユニットと機械生命体の調査である。
こうして少女と少年の物語に異物が混じり始めた。
それはあらゆるモノを変える猛毒かそれとも癒しの霊薬なのか、彼

等には分からない。

ｃｈ―１―１―ａ　意図せぬ接触

――ポチャン

そんな音をたて、四方円形の機械は海中へと沈んだ。

目的は資源、及び情報媒体の入手であり、自分と同じ機体が何機も地上に撒かれ、同じように活動していた。

…。

どうやら大きめの資源が近くにあるようだ。

発見した、これならば自分たちの創造主も喜ぶだろう。

特殊ワイヤーネットを使い、対象を鹵獲、直ぐ様主に献上する為、海上に上がり浮遊する。

主はこの回収品に喜んでくれるだろうか？　私を褒めてくれるだろうか？

半ば期待と共に主の前に帰還する。

そして主はこの資源を回収した私にこう言った。

『この海にまともな魚はいねーのか』と。

▽

あの機械達との戦闘後に大規模な爆発があった。

直ぐ様状況の確認の為に量子変換して所持していたドローンを向かわせ、現地に近づく。

どうやらあの戦闘機とブリキ野郎どもはお互いに戦争でもしているようで先程の爆発はその戦闘の余波なんだろう。

見た感じ工場だった場所の橋場が崩れている事から結構近くでドンパチやっていたらしい。

というか崩れた橋場に日本刀らしき物が刺さっているので間違いないだろう。

「ふむ、工場に海か…。さっきの戦闘機も沈んでるかも知れんな」

他にも海底にもなにか沈んだ情報媒体でもあるかもしれない。
早速数機のドローンを追加で展開して、工場と海底に回収に向かわせる。
そこまではよかった。
なぜかシルエットでわかってしまうドローンの回収物。
なぜに魚？　なぜ魚？　だがよくよく見てみればそれは魚ではなかった。

ビタン、と落とされたそれはビタビタ、ガシャガシャと暴れて地面を荒らし回る。
あぁ、多分また自分の目は死んでいるだろう。
何に突っ込めばいいのか、いやそもそもこれはなんなのか？
俺は目の前にある機械のサメに途方にくれた。

ただ言えることは一つ、この世界はやっぱりおかしい。
――あれから大体3時間位過ぎたところで工場側のドローンが廃材以外の何かを見つけてきた。

正直、もう精神的に疲れてきてあの戦闘機から奪った情報でも閲覧しようかと思っていたのだが、丁度良かった。
詳細な回収内容を指示しなかったからかガラクタしか拾ってこないし。
が、その回収品。
それはシルエットからして明らかに人型、しかも肉付きからして女性である。
今度は別な意味で目が死んだ。
というか血の気が引いた。
ドローン達が持ってきて積み上がっていたガラクタを急いで退かし、医療準備を開始する。
が、副官も言っていた通りにここには人間がいないらしい。
その女性は機械だった。

人造人間、人型機械、アンドロイド…。
「どうすればいいかな、これは――」

見る限り戦闘で破損したのだろう裂傷に陥没が見た感じいたるところにあった。

「だ…、だれ?…お、ね…が、たす、け――」

「…チッ」

助けを求める声を聞き、思わず舌打ちした。
コイツ、生きてるのか。
どうやら自閉モードかなにかで自分を保護していたらしい。

普段なら助けても良いかも知れないが今はあまり状況も良くない。
面倒な事になる、確実に。
だが――

【あの時もそうやって助けられた筈のあの娘を見殺しにしてしまったのだったか――】

嫌な記憶が甦る。
終わった筈の過去、それに似たこの状況が自身を蝕む。
合間合間に何故か副官の顔がちらつく。
ここに来るまで色々な体験があった。
陰謀、裏切り、犠牲、安堵――。
一緒にいた自動人形ももはや初期ロットは彼女しかいない。
自分の想いの結晶、最高傑作として産み出した自動人形達。
それこそ最初機の機体にはみな大切に名前をつけた。
そう大切に――

だがそんなあの娘達はもはや存在しない。
自分の愚かしさが彼女達を殺してしまった。
そうだ、そう言えば副官にも名前をつけていたのだったか？
どんな名前だっただろうか？
それももはや思い出せない。
愛着が湧けば別れが辛くなる。
だから俺はあの娘を名前ではなく役職で呼び初めたのだから――。

思考を止める。
この考えは余計だ、いらない考えだ。
余計な考えをさせてくれたこの人形に視線を向ける。
解体して情報を抜くべきだ。
それが正しい、無駄のない作業だ。
なのに――。

「ごめ……、6……D…」

誰かへの謝罪、そしてどこからか流れた水の雫石が脳裏を刺激した。
ちらつく、頭にノイズが走る。
――この不快感を早く黙らせたい。
あぁ、こんなのデメリットの方が大きいのに……。

「今回は、いや、今回だけだ。
次はない、絶対に……」

不快感を表しながらそのアンドロイドの修復を始めた。
後から何体か増えたが関係ない。
もう始めたものは仕方ない、あと数体くらい誤差だ。
作業に没頭すればこの不快感も気にならなくなるだろう。

対価は勿論いただく、記憶という名の情報を。
これはギブアンドテイク、ただそれだけ。

そんな事を考えながら思わぬ形で訪れた廃工場でただただ静かに時が過ぎていく。
何故だかこの間はあの不快感は感じず、不思議な達成感とよく分からない、悪くないと思える感情がその時にはあった。

だからこそこれが大きなミスになるとは考えられなかった。
よりにもよってこのタイミングで何らかの二足歩行兵器が急接近しているとは。
修復は何とか終えたが情報の引き抜きと痕跡の抹消。
これらが間に合わないのは確実だった。

▽

とあるヨルハ部隊員に依頼され、やって来た廃工場跡地の入り口。
内容は件の部隊員の先輩にあたる１１Ｂの捜索、またはその関係品の回収である。
投棄された自分たちの装備の回収の次いでではあるが依頼された以上断る理由もないために受けたのだが――――。

「疑問：複数のブラックボックス反応を検知。
目標のブラックボックス反応も確認」
「……９Ｓ、これは罠だと思う？」
「分かりません、ですが確認の為に行くしかないと思いますよ２Ｂ」
ポッドの言葉に警戒しつつ、アクセスポイントの隣にある階段を登る。
そこで見たのは修復されたヨルハ部隊員の姿。
「降下作戦時にいた人員、全員の義体が修復されているみたいです」

９Ｓがスキャナーモデルの性能に違わぬ精密検査を各義体に走らせる。
そして驚嘆の声をあげた。
「す、凄い。
義体の性能が全体的に２０％上がってる！
回路も見たことのないパーツが使われて――」
「９Ｓ！」
このままだと暫くは語り終わるまでは止まらないだろう。
そう考えた２Ｂは９Ｓを叱責する。
「あっ、すみません。
でも本当に凄いんですよ２Ｂ！
この義体を解析出来ればヨルハ部隊の戦力の底上げにも――」
「それは私たちじゃなくてもいい。
とりあえずわかったことだけでも教えて」
「分かりました、どうやら彼女たちは僕たちが来る前に何者かに修復を受けていたようです」
でもいったい誰がやったんだろう。
そう呟く９Ｓ、
その言葉に２Ｂはあり得ないと思った。
ましてや最新型のヨルハ部隊戦闘モデルの義体、それをバンカーは距離的に無理だとして、レジスタンスキャンプならその手の技術を持ったアンドロイドはいるかもしれないがこの数の修復する為の資材といった物資がこんなところにあるはずもない。ましてやこの数だ。

そこに改良となれば絶対に有り得ない。
するとポットから２Ｂに提案が行われる。
「提案：支援ポッドの情報提供による情報の開示。
それには９Ｓによる支援が必要と推測」
「どういうこと？」
支援ポッドたちにはポッド間でのネットワークによる情報共有があった筈である。
それを使えば直ぐ様情報を得られるはずだが、
「開示：何者かに内部機能を閉鎖され、通信機能といった一部機能が回復できていない」
どうやら相手はかなりの腕を持っていたらしい。
ここまで出来るとなると先程のレジスタンスの話も消える。
機械生命体ではない、筈だ。
敵であるアンドロイドを修復する意味がわからない。
早速９Ｓは了承するとポッドに対してハッキングによる修復を開始した。
だが９Ｓモデルですら簡単にはプロテクトが外せないよう改良されていたらしく、大分時間がかかってしまった。
「くそっ、なんて防衛コードだ。
本当にいったい誰がこんなものを――。
２Ｂ、一部だけ解除に成功しました。
中身はどうやらポッドによる映像つきの記録データみたいです。
どうします？」
その言葉に２Ｂは即答で答えた。

開示して、と。

中身はどうやら彼女たちを修復中のアンドロイドの映像だった。
しかし、これはなんだ？
空間から波紋を出して出てきた４本のアームに見たことのない機械部品、量子変換の技術。
どう考えても現地の、ヨルハ部隊のアンドロイドではあり得ない。
ならば決まっている。

（この男があのポットの――）

そしてどうやら自分たちの来る前後にまで映像が来たのだろう。
男は頭を振るとポッドに向かって『もう怪我はするなとでも言っておいてくれ』と一言残し、離脱した。

周囲の景色に同調して。
染み込むように消えた男の存在、光学迷彩だ。
更に此方の索敵に掛からないところ見るとかなりのステルス系技術を持っている。
「「……。」」

なんということだろう。
司令官の考えは的中していた。
しかも此方の言葉も理解している。

「９Ｓ、バンカーにいる司令官に緊急報告を！
対象の――」

「報告：緊急性あり」

突如ポッドから緊急の報告に指示を出そうとした２Ｂも了承しようとした９Ｓも動きを止める。

そして紡ぎだされた言葉は彼らの思考を染め上げ、停止させるには十分だった。

「報告･接触したポッドによる精査結果、対象は二足歩行による有機生命体である可能性が高い。

司令部からサーバーを通して類似情報を回覧、照合した結果――」

『恐らく対象は人間、または人類種に属する生命体である可能性が極めて高い』

その言葉を聞き、二人のアンドロイドは時間が止まったように感じた。

ｃｈ―１―２　暴走するアンドロイド達

おいっ！　それ以上掘り起こすな！　やめろ、やめろやめろー!?

廃墟都市に一人の男の絶叫が響く。

なぜこうなったのか？

なぜこんなことになったのか？

男は懇願する、そんなことはやめてくれと。

ことの顛末は男の存在が確認されてから約２日目の事だ。

いきなりヨルハと呼ばれるアンドロイド達の数が増え出したのだ。

そして、何をするかと思えば、

「私たちはアンドロイド、貴方の敵ではありませーん」

「私たちはヨルハ部隊と呼ばれる月面の人類がー（以下略）」

こんな感じで自分たちの自己紹介、いや商品説明というか街道キャンペーンみたいな事を始めたのだ。

これが大体３日程続いたのだが一向に効果が見られないとなると連中は直ぐ様別の方針へとシフトした。

要するに人間探索を開始したのだ。

完全にＵＭＡを探すテレビ番組的なノリで。

アンドロイド達には謎の熱意と一体感があった。

普段の任務では殆どが単独や小隊やダブルスでの少数編成であり、余程の重要な任務、または大型機械生命体殲滅といった事でなければこれ程の人員は割けない。

それが今回は人類、そう思われる有機生命体の接触、確保。

これ以上ないほどの大任、現地支援の為に一部のオペレーターモデルすら地球に降下する位だ。

使命感に燃える彼女たちはあらゆる方法を運用、試案した。
それは人間としての倫理感、要するに彼のプライベートを害する程に……。
突然だが人間の三大欲求については御存じだろうか？
食欲、睡眠欲、性欲がこれにあたる。
更には人の身体には生きるために排泄といった機能もあるのだ。
ここまで言えばお分かりだろうか？
彼は今しがた出して埋めた自分の排泄物を彼女たちに掘り起こされているのだ。
動物は腸の形といった要因でブツの固さや形が違ったり、その状況で体調が分かることもある。
だがそれはテレビ番組で動物相手にやるから納得できるのであって自分のものでされては最悪でしかない。
おい、やめろ！　突っつくんじゃあない、そのケースはなんだ？
よせ、やめろ!?　俺の【Ｐｉｌ】をどこに持ってく気だ!?
や、やめれ――!!
もうなんということだろう。
彼の心は色々な意味でボロボロだった。
最近、かなり体調も機嫌も悪い。
食事は愚か睡眠すらよく妨害されている。
何しろこの地球では何故か夜が来ないのだ。
寝る場所を探そうにも自分は暗くなければ寝れない。
その条件で言えばビルの中といった所になるのだがそれが出来ない。

ロボットが彷徨いているのもそうだが、問題はこういった建築物の維持をアンドロイドたちがしているということもあった。
一応は居ない場所を探してワイヤートラップといった保険をかけて寝たこともあるがそれに対して前述のロボット達が興味半分面白半分に突っ込んでくる。
お陰でドッカンドッカン寝れたものじゃない。
そして食事の方だが今では基本、レトルトかブロック食だ。
何故動物等食糧になる生き物を焼いて食べないかというと第一にまず火が使えない。
煙でも上がろうものなら直ぐ様アンドロイド達が飛んでくる。
肉、肉が食いたい。
水はあるのに。
あぁ、ストレスが溜まる……。
せめて機械化義体でさえあればこういった苦労もないんだが……。

「出来ればこの廃墟での調査を進めたかったのになぁ……」

このままここに居てもストレスが溜まるだけである。
仕方なし、ここはドローン達にでも探索させるか。
前回みたいにならないように端末でドローンに設定を入力、第一に非接触、第二に未発見、第三に回収と打ち込み量子ストレージに回収して持って来るように言った。
今度こそマシな収穫があればいいが　さて、この場所にはもう居られない。
暫くは何処かで身を隠す必要がある。

「砂漠に身を隠すか森に身を潜めるか……。
――――うん、後者だな」
そう決めて鉄骨で作られたバリケードらしき物を乗り越えて森の中に入った。
しかし生きている人間が滅亡してどれだけの時間が経っているの

だろうか。
廃墟の樹木の樹齢はもはや1、２００では訊かないだろう。
何より人の死体が、骨すら見つからない。
この星で本当に何を行っていたのか？
そしてヨルハと呼ばれるアンドロイド部隊。
敵ではないと叫んでいるが――――。
ＡＩらしき人工知能は確認できず、何故か機械生命体と呼ぶロボット連中と同じ素材によるコアを搭載し、そこから思考をしているようだ。
もはやどちらを信じればいいのか。
ギシギシと鳴らす橋の音を聞きながら、周囲を見渡し、
そこで彼は何故かある遊園地とロボット達の村に叫んだ。
『立地がおかしいだろぉぉお!?』と。
そこが元は都市であったことも忘れて。

▽

「きっと人間さんは勘違いしているんだと思うんです!!」
追加人員の降下した現地で、情報共有の為に情報交換を行っていたところで現地支援人間派遣されたオペレーターモデル６０が言い出したのが切っ掛けだった。
彼女は昔から地球に興味があったらしく、今回はかなりの倍率であったこの長期任務を勝ち取り、念願の大地に足を踏み入れていた。
それ故か、降下時点で一部の部隊と共に興奮しながらあちらこちらとせわしなく移動し続けていた。
そんな彼女が言うにはもしかしたら、人間の方で機械生命体と自分

たちアンドロイドの区別がついていないのではないか？　という話が出たからだ。
そもそもどこでそんな話が？
これは先ずその個体が人類なのかを調べる為の調査なのでは？
とも思ったがやけに強い熱意を持った一部の部隊員に押されてタスキと旗を作製し、廃墟都市内を渡り歩いて呼び掛けを行う事が決定された。
「わ、私たちは敵ではない。
貴方たち人類のみかた、よ、ヨルハ部隊――」
「ダメですよ、２Ｂさん！　そんなに恥ずかしがったりして。
人間さんが不審に思っちゃいますよー？」
「……。
私は戦闘モデル、戦闘が主体の任務である以上、私はこの街頭演説の護衛を――」
「それを呼び掛けながらやるんです。
さぁもう一度いきますよ、さん、にぃ、いち、ハイ！」
「――っ、わ、私たちは敵ではありません！」
９Ｓが時折此方を見て笑っている。
２Ｂは何故かこの行動によって顔が熱くなったように感じた。
そうか、これが羞恥心という感情なのか。
彼女はそう思いながら必死で声をあげた。
この任務は自分には不適切だ。
後で絶対に修正をするよう報告しよう。
そう２Ｂは固く誓った。

因みにこの街頭演説、３日後には２Ｂを筆頭に戦闘モデルから苦情報告が相次ぎ、調査する方向にシフトしていった。
自分たちはバトルモデルでありこの様な任務では護衛を担当するのが正規な運用、装飾品を着けて呼び掛けながらの戦闘は危険性が高く不適切であるといった苦情を筆頭に報告していた２Ｂを見ながら９Ｓは珍しいこともあるんだなと思いつつ、その情報をポッドと保存していた。
「推奨・保存」
「確かにこれは大事にバックアップしておこう」
この一人と二機の行動を彼女は知らない。
▽
「……私たちに用とはなんでしょうか？」
重苦しい空気で満たされた個室の中、双子のアンドロイドはその空気に耐えかねて言葉を発した。
彼女たちの他に室内にいるのは自分たちアンドロイドレジスタンスを纏めるリーダー【アネモネ】と通信ウィンドウに映るヨルハ部隊の指揮官【司令官】。
あぁ、この場所もやはりだめだったか。
彼女たちは仕方ないと思いつつもいつかは来るだろうと諦めた気持ちで自分たちを見る二人の言葉を待った。
自分たちには罪がある。
償いきれない大罪が、例え自分たちがやったのではないとしても――。
司令官が口を開く、重苦しい空気はまだ四散した訳ではないがこのままでもいられない。
だからこそ先に聞いて起きたかった。

『君たちにはまだ記憶はあるだろうか？』

その質問は双子にはタブーであった。
同型モデルの犯した大罪が今の自分たちを形作り、今こうしてその現状が続いているのだ。
記憶の消去と仲間であるアンドロイドからの迫害、恒常的な罪悪感の生成……。

「……。　処分されるのか、私たちは。」

どこか諦めたように聞くデボル、だが返答はある意味違っていた。
それは酷く的外れで、意味のない質問。

『――君たちの製造される前に人類による宇宙探査、いや移民計画はなかっただろうか？』

その言葉に首を傾げる、どういう意味だろうか。
腑に落ちないものの双子は答える。
ない、とは言えないと。

そもそも【あの計画】が起こる原因はとある病症が始まり、世界規模に拡散したためだ。
その一因でもある魔素は様々な要因を引き起こした。
特に技術的ブレイクスルーを引き起こし、それで私たちは作られたのだから――。
「そうか、――そうか」

何かを確かめるように二度、司令官は頷いた。
そしてまた尋ねてくる。

「そういった人類が居たとしたら、――その技術力は我々アンドロイドを凌駕しているのだろうか？」

何を言っているのだろう、要領を得ない。
リーダーであるアネモネも困惑していた。
だが、答えない訳にもいかないだろう。

「もし、もしそんな人類が居たのなら――」

それは間違いなく私たちを置き去りにしているだろう。

この言葉に二人は息を飲んだ。
そして双子は話を続ける。
日進月歩という言葉がある。
その言葉の意味は文字通りだ。
だから宇宙にもし人が居たのなら――

「私たちは人の器を守る為に長い間停滞していた」
「もしこの星から脱出し、生き延びていられたのなら私たちとは比べるべくもないわ」

「人は日々成長し続けていく。
何より残った人類を守る為に維持しか出来なかった私たちと宇宙に上がっていた人類。」

時間による進歩が違うわ。
――もっともいればの話だけれど。
そう締めくくった双子の話に司令官は沈黙した。
かの計画だけで千年以上経過している。
それだけあれば私たちには想像もつかない進化をしていても不思

議ではない。
それが人間、私たちの創造主。
司令官は此方を強い眼差しで見ている。
やがて何か頷くと、
「お前たちに是非とも見てほしい映像がある。
但し、絶対に外部に漏らさないで貰いたい」

司令官は決断と共に情報を開示した。
その映像は双子にとって何を感じさせたのか。
どこからか流れた頬を伝う雫は彼女たちに忘れていた感情をもたらした。
長い年月、流すことのなかった安堵の涙を――。

人類は生きていた。
――絶滅してはいなかったのだと。

ｃｈ―１―３　パスカルの村の来訪者

森に入った少し先に簡素な造りの桟橋がある。
その奥に争いを好まず、戦いを捨て平和を愛する機械生命体たちの村が存在した。
のどかでありながらどこか優しさに満ち溢れたそこは今、一人の来訪者を迎えていた。
「これで良かったのでしょうか……」
不安そうに呟くロボット。
彼の名はパスカル、この機械生命体の村の村長だ。
彼はつい今しがた村の入り口で奇声を上げながら、まるで動力でも切れたように倒れた男を自分の家に寝かせていた。
本来は白旗を作るために用意した布を急いで加工し、簡易のシーツと掛布として使用したが正直に言えばこれでいいのか疑問に尽きない。
だが、それはそれとしてとてつもなく高揚している自分がいることをパスカルは自覚していた。
まさか人類がこの星に生きていて、自分たちの村に来てくれるとは夢にも思わなかったからだ。
彼はこの村についてどう思うだろうか？
私たちの事をどう思うだろうか？
危害を加えられるかも知れない、だがそれでも――。

見て欲しかった、信じて欲しかった。
自分たちが作り上げたこの村を、そして自分たち平和を愛する機械生命体がいることを。

「人間さん。　ようこそ、私たちの村へ」

先程から気になって覗いてくる子供たちの相手と村の雑用もしなければならない。

彼は出来れば目覚めた時に言いたかったなと思いながらゆっくりと家を後にした。
イビキをかきながら眠る来訪者を残して。

▽

ふとむせかえるような濃い緑の匂いを感じ、目を覚ました。
自分は今、どうしていたんだったか。
ゆっくりと重たい瞼を開け、状況を確認する。
異様に狭い、木材で作られた小屋――の中でどうやら眠っていたらしい。

（くそっ、これだから生身の肉体は面倒なんだ、久しぶりに使ったせいか感覚が掴めん！
まさか眠気に負けたのか？　……なら今は捕虜にでもなって――）

身体を起き上がらせるとハラリと何かが自分の身体から落ちた。
それは白い布だ。
これを見て、どうやら自分は介抱されていたのだと気づいた。
一体誰が？　そう考えているとふとなにか明かりが点いている。
なんだ？　そうして視線を向けると――目があった。
明かりだと思ったそれは丸くてかわいらしい、黄色のカメラアイのライトだったらしい。
「オッ、オジチャン　人間サンガオキターッ！」
そう叫んでガッチャンガッチャンと音をたてながらそれは覗いていた窓から視界の外へと消えていく。
そうか、確か遊園地とロボットの村を発見して叫んだのはいいが予想以上に体力を使っていたようだ。
まさかそのまま倒れたとは……。

「あぁ、良かった。　気分はいかがですか？」
そう心配そうに聞こえてくる女性の声、これにどこか安心感を覚えながら返事を返す。
「いえ、こちらこそありがとうございました。
まさか助けて頂けるなんて――――」
「いえいえ、困ったときは御互い様ですよ
それに敬語なんて必要ありません。
気軽にパスカルと呼んでいただければ――――」
あまり気負わないで楽に話してほしい。
そういう彼に従い、お互いの事を話した。
自分たちの事、世間話、そしてこの世界の人類について――――。
「人類が月に逃げ延びて、地上奪還の為にアンドロイドを戦わせている……。
機械生命体側でもそういう認識なんだな……」
「はい、私が製造された頃には人類は一人もいませんでした。
私も機械生命体のネットワークで知った情報なので確証はないのですが……」
いや、ありがとう。そう返答すると二人で話し込んでいた足場の縁からゆっくりと立ち上がり、身体を伸ばした。
バキバキと鈍い音を鳴らすとパスカルはそれを不思議そうに観察している。
彼ら機械生命体はこの星に来た異星人によって製造され、人類の為に戦うアンドロイドたちと殺しあってきたらしい。
聞けば聞く程にどちらが正しい事を言っているのか分からなくなる。

ようやく纏まった時間が出来たので会話しながら調査した今までの情報を纏めていたが不審な箇所が幾つも浮かび上がる。
自我をもった機械生命体、攻撃されないアンドロイド基地、同素材で出来た両者のコアユニット、消えた人類と逃げ延びた筈の人類。
（異星人といい、新しい情報は入ったがこれでは何がなんだか分からんな）

時期が来たのかもしれない。
いい加減、アンドロイド達の組織からも情報を手に入れる時が……。

でもその前に――――。
「礼は返すよ、パスカル。
何か必要な物はないか？」

その言葉に数分悩んだ後、彼は答えた。
貴方の知識をあの子たちにも教えてあげてはくれませんか？、と。

後にパスカルはこの選択を後悔する事になる。
世の中には知らなくて良いこともあるのだと。

▽

「人間サン、サルトルガマタビデオオトッター」

「あのポンコツめ!!　今日という今日は許さんぞ！」

哲学じゃなくて鉄屑という名のスクラップにしてくれるわ!?
そう怒鳴りながらスパナを手に駆け込んでいく俺は思えば大分この村に馴染んだものだ。

そう考え、言い訳を並べ立てるサルトルを達磨にして放置しながら子供たちに映像機器をセットし直してやる。
パスカルに頼まれた教育、それは多岐に渡り先ずは先入観による苦手意識といった物をなくす為に特撮といった娯楽物を見せていたのだがいきなり問題が発生した。

ヒーローごっこをした子供たちの一部、怪人役の子たちが自爆したのだ。
自分が修理出来たから良かったもののパスカルの取り乱し方には慌てた。
パスカル以外には一部しか生死の概念が理解できていないらしく、あの時の、

「お願いします、子供たちにこれ以上余計な情報を与えないでください!!」

と絶叫混じりで叫ばれたことは心を抉られた。
しかし、このままではよくない。
彼は子供たちに感情しか教えていない。
死による喪失感といった事も教えなければ取り返しのつかない事になる。
そう話したときパスカルは沈黙した後に少しずつ口を開いた。

「私も子供たちと一緒にそれを受けます。
それと事前にその情報を私に確認させて下さい。」

もうあの様なことはさせたくありません。
そういったパスカルに自分は既視感を抱いた。

それからは自爆は禁止を言いつけて、暴走するサルトルを仕置きしつつ、何故か置いてあるアンドロイド達のアクセスポイントを弄って

いた。
このアクセスポイントも偽装に何故自販機なんだと問いかけたいがあえてスルー。
内部を弄り、次々とパーツをセットしていく。
よし、何とかパスカルの信頼を取り戻さねばな。
そう決意し、最後のパーツを繋ぐ。
最初に居た地球で自身の作ったそれ、出来たはいいが色々と思い出があるけどあまり多様はしたくないそれ。

付属の接続機器を取り付け、パスカルを呼び、それを起動させる。
その作製した機材はかつて彼の地球で爆発的な人気と景気上昇を引き起こし、様々な社会問題にまで発展した。
彼曰く人類の夢にして到達点、仮想空間による体験型仮想現実、そうＶＲである。

これを用いた教育プログラムを使い、彼等に様々なことを知ってもらうのだ。

「ふむ、これが仮想現実ですか。
すごいですね、正直驚きの連続で思考が追いつきません」

パスカルはこの世界に接続した際、そう口にした。
人間体験型体感プログラム、これは昔居た人間以外の種族に人間を知って貰おうと作製し、今は使うことなくお蔵入りした教育プログラムだ。
味覚プログラム、触感プログラム、とにかく人としての感覚を知る為のプログラムだが子供たちに教育をさせる為のプログラムも入っている。
一応教育プログラムなので過去にＶＲで起きたレズリアンＶＳホモデター戦争のようなことは絶対に起きない筈である。
それは置いといて、実はパスカルにはこのプログラムを体感させる

際に、少しイタズラで女性アバターを用意していたのだが全く堪えた様子がない。
むしろそちらの方が似合っているのではないか？とさえ思わされる位だった。

「あの、どうかしましたか？」
「いや、なんでも――――」

やっぱりその声でおじいちゃんは無理があるよパスカル……。
俺はその言葉をそっと呑み込んだ。
▽

正直言う、誤算だった。

パスカルの承認を得て運用した当プログラム、これは子供たちに想定以上の思想進化をもたらしてしまった。
というか想像以上にプログラムの方がおかしかった。
最初は初めての人間の身体を体感し、驚いて喜んでいた子供たち。
初めての食事に美味しい美味しいと言っていた子供たち。
仮想人格の友達と学び、遊び、成長していく姿にパスカルも喜んでいた。

が、

事態は急変する。

仮想人格の子供が突然、交通事故で亡くなったのだ。
この時点でおかしいなと気づいて止めておけば良かったのだが

まぁこんなこともあるだろうと続行したのがいけなかった。
子供たちに平等に教育する為かこのプログラムは接続した子供たちから平等に大事な誰かを奪い始めた。
それは祖母といった大事な家族であったり、大事な友人であったり、苦楽を共にする愛犬だったりした。

要するにこのプログラム、設定次第で余計な事をやらかす欠陥品だったのだ……。
プログラムが終わった頃には子供たちの笑顔は消えていた。

「人間さん、後でお話しがあります」

「ハイ……」

パスカルの震える声を聞いた俺はこれは終わったと思った。

▽

「人間という生き物はどうしてあんなにも直ぐ死んでしまうのですか？」

パスカルにはそれが不思議だった。
そういう生き物、で答えられれば終わりだが何故か無性に納得がいかなかった。
先程のプログラムで言いたい事もあったがそれよりもこの結果に感情が昂る。
仮想人格の子供が交通事故であっさりと死んだ。
即死だった。
もしこれが接続している子供たちだったらと思うと寒気がする。
他にも老衰による寿命、パーツを取り替えるだけで済む自分たちには理解できない突然の死による別れ。

あれほど生きて暖かかった手が水の様に冷たい。
自分たち機械生命体の様に頑丈ではないのだと知ってしまった。
生き物というのはこんなにも脆いのだと……。
だからこそ聞きたい、そんな別れは辛くなかったのかを。
「人間ってのは個体差で様々な対応になるけど自殺するのもいれば忘れる奴もいるし、自分みたいに慣れるやつもいる。
気にしてもしょうがないさ」
その言葉にパスカルはそうですかと返答を返し、彼に向き直った。
やはり自分たちには理解できないのだろうか、そう考えて――
「それはそうとしてあのプログラムのことは別です。
これからその事についてお話しがあります、いいですか――」
因みにこの説教は2時間程続いた。

▽

レジスタンスキャンプを少し歩いた橋の下にいつの間にか置かれていたアクセスポイントを発見した二人。
そんな報告は受けていないがとりあえず利用する事にした。
「こんな所にアクセスポイントがありますよ、２Ｂ。
一応記録を残していきましょう」
「わかった、早く済ませよう」
そうして利用した二人だったが片方が接続すると同時にもう片方にも強制接続され、二人は謎の空間に取り込まれた。

「すみません、迂闊でした。
まさかアクセスポイントを模範したトラップだなんて――」

「話は後、９Ｓ。　とにかく何とかこの状況を――」

そこで二人はハッと気付いた。
二人の服は別なものに変わっていたのだ。
ポッドさえ、いれば制服と答えたであろうそれもアンドロイドにはわからない。
おまけに知らない知識が頭の中にあり、知らない母親を名乗る人物に急かされて朝食を食べ、とある施設へと行かされた。

「どうやらこの施設になにかあるようですね……」

「探索してみよう、何か手掛かりがあるかもしれない」

帰還しよう、二人で絶対に。
そう二人は決意し、この探索を開始する。
舞台として用意された校舎の中を――。
ゲーム名『ＬＯＶＥドキッ！学園生活』と呼ばれたこの世界の中で――。

勿論これはある男がパスカルに怒られた際に、アンドロイドにも同じことが起こるのか、その反応のデータ取りの為に用意した物で他の場所にも複数設置しており、何人かのアンドロイドが同じように罠にかかった。
外に居たポッド達の救援要請で駆けつけたアンドロイド達も強制接続の対象となり、様々なＬＯＶＥロマンスを繰り広げながらどうにか脱出したが中で何があったのか彼女たちは黙して語らず、少しの間妙な空気が漂ったそうだ。

ｃｈ―１―３―２　油断

「――なんだ、これは？」

砂漠に落とした探査ポット、それの安否が気になり（更新データが送られて来ているので無事なのは分かるが）、確認に漸く砂漠に移動した自分はそこで新たな人類の痕跡を発見した。

どうやら団地らしいがここも一体どうなっているのか。
多少崩れてはいるが普通に形を保っている。
どう考えてもおかしい。
こんな砂漠では風化も早いはずなのに建物は愚か、当時生活していたであろう人の私物や資料が一部残っている。

「……。　アンドロイドが維持している、いや、これは流石に有り得ないな。
だとすれば機械生命体が維持しているって事になるが――、先に道があるのか」

進めば進む程に増える疑問、そして道を辿ると見えてくる大量の壊れたアンドロイドの義体。
ここでは便宜上、死体と呼ぶのが正しいか。
とにかく大量にあるそれらに続くように奥に道が見えた。
通るとそこは重なった廃墟の穴がかなり広い空間になっている。
そこで信じられないものを見た。

大量に居た機械生命体達のその行為に正直、ドン引きしつつも今までのとは違う状況に彼は観察を始めた。
ひたすら四つん這いになってカクカクするやつに寝転んだ個体、それに体当たりしているもの。

唯一違うのはなにもない揺りかごを揺らして、こどもと話続ける個体位だ。

「……なんかいけないものを見てしまった気分だな」

彼等はこどもが欲しいのか？　それともその為の行為に興味があるのか？

とにかく何か知らないうちに得た疲労感と共に観察していた機械生命体達の輪から出ようとしてつい、ある個体が喋った言葉に反応してしまった。

「オッパイ、スキ、スキ、スキ」

……俺も好き。

思わず自分もノリと雰囲気で肯定しそうになった。

もし彼等が同じ人類であったなら仲良くなれたのかも知れない。

ふと何かを思い出したように量子ストレージを漁る。

取り出したのはとある一冊の薄い本だ。

本来パスカルの村で子供の作り方を教えてと姉妹の機械生命体にねだられた時に見せようとしてパスカルに説教を受けた代物だ。

彼等にはこれを見る資格がある。

彼はそっとその一冊を置くと暖かい目で彼等の前から立ち去った。

願わくば彼等に祝福があらんと願って……。

ついでだが結局そんな彼等はとあるアンドロイドのペアに破壊され、とある機械生命体の兄弟を生み出し、崩落と共に大地に消えた。

同時に聖典として親しまれたその一冊の本も――。
その薄い本はきっと今も崩落した団地の奥で新しい持ち主を待っているだろう。
もしかしたら次の主となるのはこんな団地をうろつく貴方なのかもしれない。

▽

「フッ、なんだかとても晴れ晴れとしたいい気分だ。」
また余計な情報を機械生命体に与えた彼は意気揚々と団地から砂漠へと出た。
人に知恵を与えたとある神々もこんな優越感を抱いていたに違いないと思いながら気分良く砂漠へと歩いていく。
――たまには別の道に行ってみるかな。

ふと出た気紛れに道を変えてみる。
こういう新しい発見をした時にはそういった流れがきていることもある。
防御用のシールドエネルギーの配分を一部サーチシステムの索敵範囲拡大に回す。
網膜に投影されたマップ地点に大型物体の反応が映し出される。
前に探査ポットから送られたポイントと一緒か……。

ここに何かがある。
未知との出会いの興奮に彼は勇み足で向かって行った。
自分を害する事の出来る者などそうそういない、その油断が己に返ってくるとも知らずに――。

▽

「なんなんだ、一体、本当に、この物体はなんだというんだ!?」

砂漠にあったの大型物体の調査、その場所に向かった彼は有り得ないな物を目にした。

それは顔だ、何個もの大きく、そして不気味な顔がそこに廃棄されたように捨てられていた。

これがパスカルから聞いた異星人？

有り得ない、これは生物なのか？

取り敢えず調査を、そう動いたところでとてつもない既視感に襲われた。

――俺はこれを何処かで見たことがある。

始めは単なる違和感だった。

しかし、この球体の全体図を見ているうちにどうにもノイズのように何かが頭の中をちらついた。

間違いない、知っている、だがどこで？

今までの航海で見たのか、いや違う。

――もっと、もっと前だ。

多分、これは生前の――

そう思考を続けて赤黒い閃光が俺の身体を焼いた。

「――――ガァッ?!」

視界が真っ白になり、大量のアラート表示。

パワードスーツが異常を感知し、破損しながらも生命維持の為に細胞溶液とナノマシンの注入を始める。

自身の油断が生んだ完全な不意討ちだった。

先程の閃光で傷口が焼かれたというのに血が滲み出てくる。
不味い状況だというのに余計な思考が止まらない。
これが走馬灯というやつなのだろうか？
いつ以来だろう、こんな痛みを感じたのは？
いつからだろう、こんな無謀な調査を続けるようになったのは？
一体いつから、こんな風になってしまったんだろうか。
そんな思考を切り捨て、直ぐ様パワードスーツにバトルパッケージを展開し、牽制の一撃を放つ。
――出力が低い、どうやら動力機関に異常がおこったようだ。
安定性も悪い。
砂塵が舞う中をそのまま高速で飛行し、痛みを無視しながらバチバチと紫電を鳴らすレールガンで射撃を繰り返す。
敵は先程の大型物体だった。
まだ起動状態の物が残っていたらしい。
痛いと呟くように言葉を繰り返し自身を小型化したような弾幕を撃ってくる。
その弾幕が肩にマウントされたレールガンに接触し爆散した。
不安定とはいえ、こちらの防御機能を突破した。
――認識が甘かった。
こんなやつが砂漠に居たなんて……。
数分前の迂闊な自分を呪い殺してやりたい。
「くそっ、何とかしないと――」
量子ストレージに格納された予備の携行兵器を取り出し、直ぐ様迎撃を開始する。
しかし、予想以上に硬い。

此方の攻撃が通らず、彼方からの攻撃は此方の障壁を簡単に貫通する。
不味い、このままだと此方が持たない。
機動戦闘によるGが傷口を抉る、だがこうしなければ敵の攻撃に当たる可能性がある。

「仕方ない、か」

正直に言えば使いたくはない、だが手はあまりない。
直ぐ様機体のジェネレータに直結するエネルギーラインを手持ちの火器に繋ぎ、チャージを開始する。
さっきの不意討ちにより不安定な出力と使った際に、パワーダウンした時の対処、ましてや飛行中には危険だ。
一気に着陸してから一撃で決める必要がある。
ナノマシンが効いてきたのか痛覚が感じなくなってきている。
決めるしかない。

そう決意して、相手が動きを止めたことに気付いた。
いや、そうじゃない。
あれは――――

その場で高速回転を始めた大型物体の出力が異常な程に増えていく。
そこであの兵器の言葉を思い出す。

『こんな世界、イラナイッ!!』
それは悲痛な叫びだった。
どうしようもない怒りだった。
だからこそ分かる。間違いない、こいつは自爆するつもりだ。

だが、いったい何故？

あちらが圧倒的に有利だった状況での自爆、不可解だ。
しかし、考えている時間はない。
悪態を着けながら降下し、大型物体に対して一撃を放つ。

――止まらない。

出力が更に高まる。

二撃目はなんとか相手にダメージを与えたがそれでも止まらない。
止めなくては、そう思っても不安定な出力と砂塵による威力の減衰で決定打にならない。

こんなところで――。
悔しさが込み上げる、どう考えても間に合わない。
あんなエネルギー量で自爆されたら地表は焼け、地軸にも影響を与えるだろう。
そうなればここは死の星だ。
もう数秒もない、逃げようにも逃げられなかった。

せめてこの星だけでも守りたい。

「――副官へ、今マークした座標に砲撃支援を。
繰り返す、指定した座標に砲撃支援を。
時間がない、一帯に向かって掃射しろ」

そう通信すると直ぐ様全機能を防御に回し、後退した。
避難は間に合わないだろう。
最悪、意識データだけは無事だろうがこの義体はどうなるかわからない。

「あぁ、あいつらはこの事についてどう思うかな……」

思い出すのは副官にパスカル、その村の機械生命体達。
泣いてくれるだろうか、それとも怒られるのだろうか？
そんな事をポツリと考えながら来た衝撃と閃光に意識を手放した。

▽

「なんだ、これ……」

デボルとポポルの二人はキャンプから依頼された補充品の回収に砂漠へと来ていた。
その事を利用して人類の探索も出来る限りしたが未だに成果はない。
それでも二人は諦めず、補充品を集めながら彼を探していたがその日は異常な出来事が起こった。
砂漠に起こった強烈な衝撃波と閃光、彼女たちは偶々運良く、離れた岩場に隠れることができ、被害を免れた。
そうして出てきた彼女たちを待っていたのは赤熱化した砂漠の一帯。
何があったのかはわからない。
だがこんなことが出来るのはもはや一人しかいない。
ふとその赤熱となった大地から何かが此方に歩いてくるのが見えた。
その機械装甲は熱によって焼け爛れ、内部がどうなっているのか想像もできない酷い有り様だ。
まるで亡霊のように覚束ない足取りでそのまま自分たちの岩場の近くまで来ると空間から何かを取り出し、装甲を脱いだ。

彼女たちは絶句した。
それは自分たちの探していた人物だった。
身体から焼け焦げたような異臭を発し、皮膚は爛れている。
見れば見るほどにどうして生きているのか分からないほどだ。

不意に気を失ったのか彼が倒れる。
それを彼女たちは慌てて支え、日陰へと運んだ。
触れてみて分かるその異常な体温、もはやこの熱さでは身体機能に異常が出ているだろう。

どうしてこうなるのか。
また間に合わなかった、そんな感情が脳裏を過る。
ふと彼が持っていた物体に視線を向ける。
赤い十字架の刻まれた金属ボックス、もしやとおもいその場で開けようとするがナンバーロックがかかっていることに気づく。

「そんな……。これじゃあ開けられない」

どうする、そう聞こうとして彼女の片割れはその箱へとハッキングを仕掛けた。
これしか希望はない、なんとしても助けるのだと回路が焼ける激痛の中で叫んだ。

「デボル!!」

その後の言葉はない、だが分かる。だって私達はそういう風に造られたのだから、

機材をセットし、マニュアルに従い中にある溶液の入った特殊な注射器を何度も彼の身体に打ち込む。

蒸気と共に彼の肉体が再生し、目にも止まらぬ早さで枯れ枝のようだった肉体にみずみずしさが戻った。
しかし、意識はまだ戻らない。
そんな現状を嘲笑うかのように敵性反応を持った機械生命体がこちらへと向かってきている。

「少し待っててくれ、直ぐに戻るから」

デボルは彼を眠るように倒れたポポルの横に寝かせると武器を抜いて立ち向かった。
例えそれが多勢に無勢であろうと自分たちの罪を償うために。

ｃｈ―１―３―３　ジョークグッズと書かれたアイテム

暗闇の中でふと意識が覚醒する。
なにも見えないその真っ黒な景色、その一点で輝いている場所があった。
近づくとその輝きが辺り一面に広がり、黒の背景を塗り潰した。

「……。　公園、か」

そこは遊具の並んだ、かなり昔に見た公園。
ある意味自分たちの始まりの場所でもはや色褪せた記憶の残り香。

ふと声のする方に視線を向けるとジャングルジムの上で三人の子供が話し合っている。
――なるほどな。
ようやく理解が追いついた。
あぁ、そうか、これは夢だ。
だってその三人の内の二人はもうこの世界にはいないのだから。

「――いつか、うちらで夢を叶えようよ。
――くんは科学者でロボット作って、――くんは正義のヒーローやろ！
うちは――くんの作った宇宙船に乗って宇宙人とかと仲良うなるんや。
頼りにしてるで、未来の科学者さん？」

一人の少女が興奮したように二人の少年に話しかける。
それに対して気だるそうにした少年は少し自慢気に懐から紙を出して二人に見せびらかすように広げた。

「ふっ、ばかめ。　現時点で超発明してる俺にそれは無意味でござる。
見よ、この新しき我が発明の設計図を!!」
「いや、完成品を見せろよ、そこは。」
「いや、国から色々言われてて造れんのだ。
安全性とか技術検証とか予算とか――――」
「まぁええわ、うちの生きてるうちに宇宙船おねがいなぁ」
「俺もヒーローやりたいから秘密基地と変身セット早く作ってくれ」
「……君たち俺任せにし過ぎでしょう。
こうなんか手伝ってくれるとかないの？」
「「ない!!」」
「こ、コイツらは……」
わなわなと震えて、遂には二人を追いかけ回した男の子。
他の二人の少年と少女はキャーキャー言いながら、その子から逃げ回る。
なんて懐かしいんだろうか。
このままだとあの子達に引き離されてしまう。
追いかけようとして身体が動かない事に気付いた。
景色がボヤけ、塗り替えるように激しい光が此方に向かってくる。

「まっ――――!?」

咄嗟に呼び掛けようとして背景が変わったことで無駄だと気付いた。

辺りを見回す。

今度の景色は散らかった研究室の個室みたいだ。

そね個室のデスクに繋いである受話器に向かって少し成長した少年が怒声をあげていた。

「なんでだ!? なんでそんなことになる?

なんでアイツに脳腫瘍なんか――――」

「俺だってわかんねぇよ!! アイツの調子がおかしいからって検査したら……。

なぁ、どうしたらいい?

どうすればいいんだ?! なんとかなんないのかよ!?」

「――――こっちでなんとかしてみる。

金も俺から出す、取り敢えず待たせてくれ。

きっと治るさ、絶対」

あぁ、この記憶は――――。

少年は大丈夫だと繰り返し友人に告げて明るい声で受話器を置いた。

彼は急いでネットから医学書、論文、そういった物を流し読みし、目にも止まらぬ早さで脳へと情報を積み込む。

ここまでしか映ってないがあの少女の病状は高グレードで何とか自分が金を払って病院にいれたものの容態は良くならなかった。

ヘタをすれば半年も持たない。

そこでこの最年少の科学者としてここにいた少年は急速に医療分野の知識を詰め込み、ナノマシンによる治療技術の確立を推し進めた。
特典として得た知識は彼をありとあらゆる面で背中を押し、遂には歴史にも書かれる程の医療発展を成功させた。
開発は僅か1週間、だがその歴史的な発明はその時点では使えるはずもなかった。
――その技術は本当に安全なのか？
臨床試験もテストケースすらない、その新技術はあらゆる意味で早すぎたのだ。
成功例の無いものを試す訳にはいかない。
だからこそ、彼は急いで様々な末期患者の元へ走った。
頭を下げ、様々な保障をして、死に物狂いで駆け回り、――そして成功した。
テストを受けた全患者の治療率が１０割、つまり全員成功という結果を叩き出した。
この結果を受けて彼女へのナノマシン投与は決定する。
間に合った、ベッドで眠る彼女を前に友人とその家族に説明し、次の日に投与手術が始まる事に決まった。
すべては上手くいっていた。
その日の晩に彼女が亡くなる事さえなければ。

容態の悪化、まだ自分の転生前まで進んでいない一部の医療技術による二次白血病と新しく転移したと思われる腫瘍。
ナノマシン治療という新しい分野に傾いていた彼はその病状に気づくことは出来なかった。
検査も十分したというのにだ。

「あっ、えっえ？　はっ？　な、何で？」

端から見ても分かるその絶望感。
あと数日、いや数時間あれば助かった命。
頭が真っ白になった。
どうして？　何故こんなことが？
あと数時間だったんだぞ？
たった一つのアンプルを打つだけだった。
なのに、なのに――――。

「ふざけるなぁ!!」

彼は自室に閉じ籠ると周囲の物に当たり散らした、新しい論文、書きかけの技術理論、患者からの感謝の手紙。
手当たり次第に破り、叩きつけ、踏み潰した。
そして、ある設計図が目に入り、そのまま怒りに任せて破ろうとして手が止まった。
かつて三人で集まった時に見せた宇宙船の設計図、そこに彼女の文字で『うちらの宇宙船！』と赤色の鉛筆で書かれていた。

少年はひたすらそれを眺めて号泣する。
どれくらいたっただろうか？
涙を拭い、それを胸に抱くとデスクの上を叩き落として設計図を広げた。

このままでは終われない、あの子の夢を叶えよう。
そう決意して、――――また場面が変わる。

急に場面場面が跳んで分からなくなってくる。
コマ送りにみたいに景色が移動し、止まった。
だがそこにはまた少し大きくなった少年とその友人達がいた。
どうやら完成した宇宙船の艦橋にいるらしい。

彼等は口々に色んな事を話し合っている。

その輪に近づいていく人影を見てそれが自動人形だと気付いた。
しかも、見覚えがある。
副官、そして他の初期ロット。

懐かしい、確かにあの頃の記憶だ。
そう、宇宙に出て間もない頃だったはずだ。

「艦長、救援信号だと思われる反応があります！」

その声に先程まで楽しそうに話していた彼等は直ぐ様自分の持ち場につく。

「どこだ？」

「すぐ近くに反応があります、どうやらこの宙域で発信されいるようで……」

それを一緒に眺めていた少年が彼へと言った。

「行こう、初めての知的生命体との交流としては十分だ。
○○、アイツに出来なかった事を俺たちがやってやろう！」

その言葉に彼は頷く、当然だ。
そう返答して彼等は救助挺に乗り込んだ。
もしもの為に自衛の為の武器と医療物資を詰め込んで――――。

やめろ、その船に近づくんじゃない！

咄嗟に声が出た、これはもう変えようのない過去だというのに。
最悪のファーストコンタクト。
救助に向かった人員、自分以外が全て殺害された最悪の事故。
宇宙へと向かった無知な自分たちへと無慈悲な悪意が襲い掛かる瞬間だ。

「やめてくれ、夢なら覚めてくれ、早く」

多少トラブルはあったがドッグらしき場所に船をつけると彼等はそのまま船内に入った。

「……どういう事なんだ、これは」

多少、停電もしているのはいい。
だがこの大量の血痕はなんだ？

「嫌な予感がする、各自火器使用自由。
気をつけろ！」

そう指示を出すと各班に別れ、行動する。
その宇宙船は異様すぎた、言葉は自分たちの英語と同じであり、時折日本語で表示されているイシムラという文字。
探索すればするほどにその異様さが増してくる。
大量の死体袋と損壊が激しい死体。

そして、

死体の化け物と遭遇した。

▽

『助けてくれ!!　コイツら銃が効かない!!
がぁぁぁっ!?』

「二番班、何があった!?　二番班!!」

突如各班に伝えられた通信、二番班からの緊急連絡。
そこから聞こえた奇声と人員の断末魔。
なにか不味い。
直ぐ様確認の為に回線を開く。

「至急二番班の救助、三と四番班で状況を確認して対応を――」

ガンッ、

そんな音共に通信は妨げられた。
次いでダクトから奇声を上げ、【ナニカ】が現れた。
そして、状況は瞬きする間もなく変化した。
逃げ出す者に戦う者、とにかくそれが出てきてからは皆、必死だった。

銃が得意な部隊員がヘッドショットをソイツに決めたが逆にそれで暴れまわるようになり、その部隊員はソイツの鋭い爪で切り刻まれた。
同伴していた自動人形が何とか応戦するも戦闘モデルではないために乏しい攻撃手段でじり貧となり、途中で音声ログとやつらの手足を切り落とせという血文字を見つけなければ抵抗も出来ずに殺され、誰も助からなかっただろう。
だが、その時点でもう半数も人員が惨殺され、何とか対処方を伝えたのはいいが持ってきたのは対人用の火器。
あの化け物にはストッピングパワー自体明らかに不足しており、現地で何とか武器を調達し、現地の生存者と協力して――。

――あぁ、光が迫ってきた。

▽

「――いやな夢だ」

不快に汗の感触に最低の夢を見て最悪な寝起きとなってしまった。
身体を動かそうとして、肩にもたれ掛かっている女性に気が付いた。
どうやらあの攻撃でもうダメだと思っていたのだがこの砂漠が見える洞窟にいる所を見るに助けられたようだ。
よく見れば入り口にも身体から紫電を走らせ倒れているもう一体がいた。
近場で倒れている二人の女性型アンドロイド、この二人が俺を助けたのだろうか。
近くにあった自分が取り出したらしい医療ボックスを見るとどう

やら無理矢理開けたようで一部の回線が焼き切れていた。
このボックスには型落ちとはいえ、医療用に強固な防御プログラムが組み込んであったのだがそれを無理矢理に解いたのだろうか？
特定のコードさえ打ち込めば開くのだが知らないなら無理に開けるしかないが彼女たちに解けるとはオモエナイガ……。

「とにかく借りは返さないとな」

立ち上がると直ぐに彼女たちを収納し、先程までいた団地へ向かう。

あそこにあったアンドロイドの死体を使えば修復は出来るはずだ。

そう考えて量子ストレージから予備のスーツを装備し、ステルス機能を展開させた。

しかし、アレはなんだったのか？
口ぶりからしてこの星を守っていたような感じではあったが……。
また謎が増えてしまった。
もしかするとアレも元は人間――――。

……。　後にしよう、先ずは借りを返す所から。
そう決めたのだから。

▽

結局、こんな所にあるこの死体では修理は儘ならなかった。
どうにもあの機械生命体はアンドロイドからもパーツを取って自己強化しているらしく、どう考えても修復するには部品が足りない。

直す方法はある、だがこれは駄目だ。

一応、命の恩人である二人にこれは出来ない。
だが見殺しにするにも――――。
「――――すまない、せめて量子ストレージに壊れている部分さえなければ」
再度、謝りの言葉を口にして男は動き出した。
姉妹の身体の横に別の義体を設置する。
本当にまじで許してくれっ!!
姉妹の身体からパーツを剥ぎ取り、その義体に移していく。
ここで唐突に明かすことになるが彼が謝っているのは姉妹の身体を裸にしてパーツとりしていることではなかったりする。
原因は今、移している義体。
それは彼がアンドロイドを産み出したと同時にアダルトメーカーに打診され、作った人類の夢。
かつて人々の間でパソコンが普及したのは何が要因だったのであろうか？
インターネット？　コミュニケーションツール？　情報端末？
――――それもあるだろうが自分は違うと断言する。
スッと取り出したのは一枚のフロッピーディスク、これだ。
中身はドットで彩られた【エロゲー】である。
そう、人はエロスで進化したのだ!!
この義体は彼がそういったメーカーと「嫁を作ってほしいなりぃ！」と叫んだ自分を引き取ってくれた独身の義父に同士たちの心の叫びに応えて作った最強のアダルトグッズ、オナホロイドとセクサロイドシリーズである。

当初これを作った時は様々な課題があった。

というよりも義父の注文が煩くて何度も作り直したことなのだが――。

『アイドルはう○ちしないのと一緒で俺の嫁はトイレなんてしない』だの、物騒だからと戦闘力をつければ『○○タンはこんな力は持ってない可憐な乙女なんだ！　力を元に戻して!!』とかあって制作は難航した。

世話になっていたせいか余計にその注文にも応えて作ったから一際思い出もあるのだが……。

何もここで出ないでも――。

おまけに生体義体しか積んでいなかったからかアンドロイドに使えそうな部品は先の通りにこれだけ。

故障で一部取り出せないストレージにあるかも知れないが無理な物は無駄だ。

ふとその義体に残ったログを流し読みしてみる。

『我慢できなくなった時はどうぞ』

澄ました顔でドヤ顔しながらこちらを見る副官を幻視した。

「変な気を遣うんじゃねぇー!!」

持っていたパーツが乾いた砂に八つ当たりで叩きつけられたが乾いた音を

たてる以外に特に何もなく終わった。

何故か虚しい、そんな気持ちになりながら彼は二人の修復を開始した。

先程までの事は忘れるように言い聞かせて。

ｃｈ―１―４　有り得ない青空

「おやっ？　これは――――水？」

その日、空から落ちてきた水滴にパスカルは疑問を浮かべながら上を見上げた。

いったいどういうことだろうか？

見上げた先には今まで見たことがなかった雨雲が空を覆い、大量の雨水を降らせていた。

何かあっては大変だと急遽、見張りに雨具を、自分たちは家の中に避難する。

そう、これは間違いなく【人為的】に行われた現象だ。

そもそもここでは地軸のズレにより基本的に夜が訪れることもないし、天気が変わることもほとんどない。

そして、これを自分たち機械生命体が起こしたとは考えられない。

ましてやアンドロイドの人達には――――。

だとするならばこれを起こしたのは人間さん、ということになる。

だがいったい何の為だろうか？

そう考えている内に何かが空を切り裂いて堕ちてきた。

流星とは違う、機械生命体ともアンドロイドとも違う人間さんの造り出した【巨大な船】が。

▽

「まさかの大当たり、真実が彼方から転がり込んでくるとは――――」

助けてもらって何だが少し拍子抜けである。
しかし、やはり人類は絶滅していた。
この事実に衝撃は隠せなかった。

塩の柱になって崩れる病、聞いた覚えも見た覚えもあるような感じだ。
大分前の惑星探査で何度か同じものにあった記憶がある。
多分、どれか近しい現象がデータベースにあるだろうが今調べに戻るのも少々面倒だ。
「……雨？」

落ちてきた水滴を眺めながらふとこれと同じ降下用のパッケージがあったのを思い出した。
案の定、レーダーを確認するがどれもノイズが走り始めている。
雨雲を発生させると同時にあらゆる観測機に干渉させるチャフや粒子を広範囲に撒き散らすこのレインパッケージ、本来はエネルギー兵器に対する煙幕に近い兵装何だがこの星ならば相当有効だと思う。

基本的にこの星では近接兵装やミサイル以外はほとんどエネルギー兵器らしく、このパッケージのお陰でまともに運用は出来ないだろう。
これならばこの視認性の悪さもあって発見率も下がる。
――のだが、

少しして降下してきた武装輸送船を見て溜め息をついた。
おそらくは目視による自分の現在地、現在状況を確認する為に来たんだろうが、

「いくらなんでも大袈裟だろうに――」

輸送船から青いスキャナー光が辺りをサーチし、此方にポッドを射

出した。
射出されたポッドはそのまま慣性によってこちらに落ちてくるとホバリングを初めて、緩やかに降下していく。
それにすかさずデータリンクを開始し、パワーアーマーやスーツ、ストレージを交換して観測ポッドとしての設定をした。
もしかしたら壊れただろう一番目の観測ポッドの代わりになることを期待しながら姉妹のアンドロイドを背負い、パスカルの村へと向かう。

あの二勢力がこの豪雨となった砂漠で自分たちを見つけることは無理に近いが一応は警戒しておく。
さて、これからどうするかな？
姉妹の中の情報にあった人類滅亡のデータの裏取り、機械生命体の製作者の探索、アンドロイド達の言う嘘と月にいる人類を語るなにか。
機械生命体のネットワークも怪しすぎる。
こういうのは大抵、上位のＡＩか個体に支配されているのが落ちだ。
「……っと、言ってる側からか」

幼い少年と女性、機械音声が先の道でそれぞれ聞こえてくる。
光学迷彩を貼ろうにも豪雨の中だし、何より新しいスーツのセッティングはまだ途中だ。
後、二、三分だがどうにも避けきれそうにない。
姉妹もストレージに格納してはセッティングが止まってしまうだろうし。

「まぁ、会ってみるか。
最悪戦闘でもいいし」

前回とは違う、より戦闘に最適化した新型スーツ。

あらゆるグレードも前回の物とは比べ物にならない多目的用の最新型。
もう負けるわけにはいかない。
ただただ前へ、退くことだけはしない。
そして、――――そこで二人のアンドロイドと出会った。
▽

「貴方は……」

その機会は唐突に訪れた。砂漠地帯に落ちた衛星兵器の攻撃理由の調査、【人間さん】に何かあったのかもしれないと近辺を移動していた私達はその緊急要請を受諾し、同時にそれを調べにきた機械生命体と交戦した。
何かあるとは確信していた、そしてこの攻撃がその人間さんによるものだとも。
だから、唐突な出会いとはいえ、これは必然、運命だったのだと頭の片隅でどこか感じていたのだ。

知らない筈のない、ずっと探していた人物。
だが、そんな彼からは思いもしない言葉が返ってきた。

「よりにもよってヨルハとは――――」

ツいてないな――――そんな台詞を聞いて私たちは胸が苦しめられる様に感じた。
否定されている、それがどうしようもなくただただ辛い。

「そ、その、何か僕たちに出来ることはありませんか!?」

その険悪になっていく雰囲気に堪えられなくなったのだろう９Ｓがすこし大きな声で彼に尋ねた。

私も気持ちは分かる、話すたびに彼からは猜疑心と嫌悪感の様なものが私達に、ヨルハ部隊に向けられているのが苦しいのだ。
私達は貴方の力になれる、私達は人類の味方だと証明しなくてはならない。
６Ｏの言葉を思い出す、人類は私達アンドロイドと機械生命体の区別がつかないのだと――――。
だからこそ、証明しなくてはならないのだ。

「――――９Ｓ！」

話すのに夢中な９Ｓに注意を促して武装を展開する。
それに数瞬遅れて機械生命体が砂地から飛び出してくる。

「アンドロイドダ！コロセー!!」

物騒な機械音声と共に襲い掛かってきた奴らは直ぐ様私達で鉄屑へと変えた。
この人には触れさせない、必ず守り通してみせる。

「僕たちの後ろへ！」

９Ｓが声をあげると同時に私が斬りかかる、人類を守っているという高揚感が私達を支配する。
機械生命体が全滅するのにあまり時間はかからなかった。
だけどもそれを警戒しながら眺めていた人間さんはこちらに何もいっては来ない。
言い知れぬ不安が私達を蝕んでいる時それは来た。

「あのー、もしかしてなんですけど貴方は人間さんだったりしませんか？」

破壊した機械生命体から転がりだした不気味な形をした球形の存在。

それは自身をエミールと名乗った。

▽

それはある意味必然だったのかも知れない。

あれだけの子機がいたのだ、まだあるには違いないと思っていたがまさか機械生命体の中から出てくるとは思わなんだ。

これは幼体だったりするのか？もしくは機械生命体に寄生して成長する第３種なのか？もしくは羽化した機械生命体の新種、進化種なのか？

謎が更に謎を呼んでしまった、人類が造り出したカウンター的な敵性種なのか。

ましてや側に置いたとして成長すれば襲い掛かって来るのではないか？

だが、

（少なくともアンドロイドの味方ではない、か……）

見れば先程名乗りをあげたヨルハ機体達があの不気味な悪趣味の顔面、【エミール】を警戒している。

勿論俺自身もだ。

なんせこいつの親玉？に撃たれて死にかけたのだ、あまり冷静には対処出来ないかもしれない。

「そうだとしたらなんなんだ、何か用か」

自分でも思うくらいに少し冷たい声をかけてしまっているが仕方ないとは思う、なのにそんなに気にしていないのか彼?は元気よく此方に返答してくる。

「やっぱりそうなんですね!!うわー、僕初めて人間さんに会いましたよ!!
人類は絶滅していなかったんですね!!」

などと宣ったのだ。

「2B！　やっぱり壊しましょう、コイツ絶対新種の機械生命体ですよ！」

こんなことを言うもんだから只でさえ怪しんでいたアンドロイド側の不快指数が振り切れてキレてしまっていた。

「同感、人間さんには下がって欲しい」

武器を構えて、俺を下がらせようとする二人を俺は逆にデポル、ポポルを預けて逆に問う。

お前は何故そんな事を知っているのかと――。

その問いにエミールはこう投げ返した。

「うーん、ごめんなさい。なんだか思い出せないんです。
そもそもなんで僕はここにいるんでしょうか?」

――マジかよ、今時記憶喪失なんて流行らないぞ。

▽

その後は紆余曲折ありはしたが結局、ヨルハ機体の言葉に堪えられなくなったのだろうエミールは泣き出して土煙をあげながら走り？去ってしまった。

貴重な情報源であったのにこの２人は――。

ともかくこうしていても仕方がない、敵の増援や余計なイベントが始まる前に俺は２人の提案により、通称キャンプと呼ばれるアンドロイド達の集落へと移動日することになった。

しかし、ポッドの言葉を聞くにあのエミールは不可思議生命体と呼称されているとこを見るとやはりあのエミールは更なる謎を解く鍵になるのは間違いない、この星には何かがある。

恐らく機械生命体、アンドロイドの知らない何かが――。

どこか思い出せぬ即知と見知らぬ未知に揺らぎながら、私はどこかでこの事象に興奮と、哀愁を感じていた。

▽

しかしなんでヨルハの機体だけ機械生命体のコアを再利用してるんだ？

例の二人をそのまま自分で持ち替えてようやっと会話してくれた人間さんにそう問われた時、僕たちはその場で固まってしまった。

人間さんは知らなかったのか、と僕たちに再び問いかける。

そんな筈はない、僕たちのブラックボックスがそんなもので出来ているなんてあり得ない。

「そんな筈ありませんよ、僕たちはアンドロイドでヨルハ部隊の一員なんですよ？それがあんな奴らの部品を使用しているなんて――」

「いや、思えばなんでそんなに嫌がってるんだ？」

人間さんはそれを不思議そうに首をかしげる。
そんな行動に僕たちどこか傷ついていた。
そんな中、人間さんは言葉を続けていく。

「戦争しているんだろう？だったら尚更だろうよ、戦えば戦う程に武器やパーツは磨耗していく、ならどこかでその物資は抑えなくてはいけない。なら――」

敵と味方の物資が少しでも使えるように共通化していくのが自然だろうよ。
例えば弾薬、弾がなくなれば撃てない。だが目の前に敵の弾薬があってそれが撃てるなら？
例えばネジ、廃棄された車両から回収して戦地で部品取りが出来たなら？

「そうやってどんどん効率化してより良く殺していく、それが戦争ってもんだろう」

そうして替えの部品、替えのないものがなくなるまで戦い続ける。
虚しくならないのかお前達は？

そう、問いかけられて僕たちは言葉を返せなかった。
キャンプへとたどり着くまで僕たちは無言でただひたすらに歩くしかなかった。

何処までこの戦いは続くのか、終わった後はどうするのか、そして――どうしてブラックボックスに機械生命体のコアが使われているのか。

僕たちは、ヨルハとは？

そんな無言で自問自答を繰り返す僕を悲しい目で見る２Ｂに僕は終始、気付けなかった。

それを鋭い目で観察していた人間さん以外は――。